

終わった後から引っかかる事が見えてくることがあります。違和感ですよ。その違和感がなんなのかと考えていました。

私たちは、抑圧体制の中で生きているのが、現実かと思います。ただ、その抑圧的な空気があるからこそ、違和感が如実に出てくるのだと。

ある先生がこのように言われていました。「弱さの中に本願が宿るのだと」そういうことだと思います。

どのような場においても、その場の空気の責任が、その場にいる人にあるわけです。それを、問うことの大切さは、その場その場で必ずあるのだと。

今回、自主伝研にて発表をさせて頂きました。私としては、自身の苦悩を表に出すだけだったんですが、その場の空気というものが何か違うのかなと感じました。その場でも違和感は少しありましたが、その場で言えないということは、自身の自覚が足りないということなのでしょう。ですから、違和感を通して心の底にあるような問題性を出して頂けたのかと思います。

上手く言えませんが、何か尋ねられる方が、もしかしたら君はこうじゃないのか？という風に感じる時があったわけです。

それは、まるで自分の身を案じてくれるような感覚ではなく、私の思いを確かめていくような感覚を感じるわけです。それも大事な作業なんです、やはり作業なわけです。

そうではなくて、人の悩みを通して、人の身の課題を共に問うような大切さがあるのかと思います。

自主伝研を通して感じた身体感覚的な違和感というものがあり、「何か、こう違うな」と感じた私がいるわけです。勿論、関係性というもの、お互いにその人のことを理解していく時間というものが必要です。しかしながら、仏教に置いて、ある先生から言われたことがあるのですが、「仏教で一番やっちゃいけないのは決め付けなんだと。」そのように言われたことがあります。私自身が、宗教とは仏教とは自分自身とは決め付けてきた中での言葉だったわけなんです。

私が早口になるというのは、そういった身体的な危機感。私がある場を信用していないという問題性が孕んでいるのも事実なわけです。緊張するというものが如実にそうですよね。勿論、真実を言うことの恐れもあるのでしょう。

自分の発言したことが正しいとかを言いたいのではなくて。私たちは、楽しいことも共感したいんだけど、それ以上に苦悩も人と共感したいということを願って、何より自分を本当に愛したいと願っている。という、人間存在であることを何かその場にある空気から、それを感じにくかった時があるわけです。

何か、人を探るようなといいますか。どうしても、言葉には限界があるとは思いますが、けれども、そういった人の願いを信じることの大切さがあると思います。

つまり、自分自身を信じれていないから他者を信じれていないという自他疎外という空気ですよ。どのような場にもあると思います。消えることはないのでしょう。

それから、私のことを「十分、優しい」と言ってくれた方もいました。私が、そして家族全員が抱えているような気質がそうなんですよね。「優しい」とは善悪の先入観が強く感じますが、「優しい」というところに苦悩してきた自分をさらけ出せなかった幼少時の自身の願いに出遇って、いま表に出していきたいわけなんです。ですから、「十分、優しい」というのは違うわけです。これ以上、もっと優しくなりたいのではなくて、その過度な「優しさ」というのは、傲慢なわけですから。ある意味、優しくないわけです。

今回感じたのは、その場の空気という責任感です。どこまでも、その空気に耳を傾けていく。声にならないような声に耳を傾けていく。人が集まり、話せる場を頂けたからこそ、そういった身体感覚を感じさせて頂けたことが、今回の学びだったかと思います。